



水戸芸術館  
ART TOWER MITO

—まちの中へ、人のこころに—  
楽しもう、アート・生活・MitoriOを

一まちの中へ、人のこころに一  
楽しもう、アート・生活・MitoriOを



公益財団法人 水戸市芸術振興財団  
理事長 福田 三千男

水戸芸術館の近くで生まれ、かつてそこにあった五軒小学校に通い育ちました。京都の大学を卒業後、水戸に戻ったものの何かもの足りない思いをしていた時、旧制水戸高校出身で三井不動産のトップをお務めになった江戸英雄さんが財団の理事長に、そして水戸芸術館の館長に吉田秀和先生が就任なさると知りました。学生時代から音楽を聴いていた私にとって、音楽評論や日本にクラシック音楽を広める活動をなさっていた吉田秀和先生は、憧れの人。水戸市の本気度が分かったような気がいたしました。水戸市が市制100周年を境にして、新しい手～天下に先駆けて“芸術の館を作る”～を打ってきたのではないかと。当時、芸術館には何回か足を運ばせていただきましたが、まだ私の会社は小規模でしたのでお手伝いはできませんでした。

吉田先生は1988年から2012年まで、四半世紀にわたって館長を務められ、この水戸芸術館の基礎固めや運営の強化をして下さったと思います。江戸さんの跡を継ぎ理事長に就任された、世界的なファッションデザイナーの森英恵さんは終生当財団の顔として、水戸芸術館そして水戸市のイメージアップに

ご活躍下さいました。創立以来、財団の副理事長を務めておられました地元経済界の要人である吉田光男さんが昨年鬼籍に入られ、さあ、どうなるのだろうと案じていた矢先、常務理事の天津さんから「是非とも理事長に就任していただきたい」という強い要請があり、この度理事長に就任することになりました。今、このような機会をいただきお引き受けした以上は、理事の皆様と力を合わせ、財団運営の充実化を図っていきたいと思っております。

水戸芸術館館長の小澤征爾さんのご挨拶に「水戸芸術館は1990年に開館し、吉田秀和初代館長を中心に充実した活動を行い、その存在は日本の芸術文化の歴史に残るものになってきています。これからも音楽・演劇・美術をますます発展させ、芸術を身近で親しまれるものになるよう努めてまいります」とあります。また森英恵さんも同じように、財団の運営を「まちの中へ、人のこころに」というモットーで表現しており、私もお二人と同じように質の高い内容の事業を継続していくことを基本に、その活動をより多くの人を楽しんでもらえるように工夫していくことが大切だと考えております。

まもなくこの7月に、隣に新しい市民会館が完成する予定です。この水戸市民会館と、水戸芸術館、そして京成百貨店の3施設からなるMitoriO（ミトリオ）地区の振興が、これからの水戸市の活性化にとっても重要なものと認識しております。今後は「楽しもう、アート・生活・MitoriOを」という視点で、皆さんとともに運営の強化に努めて参りたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

※これは、2023年5月14日に水戸芸術館会議場で行われた就任記者会見におけるあいさつをまとめたものです。

水戸芸術館 一まちの中へ、人のこころに一

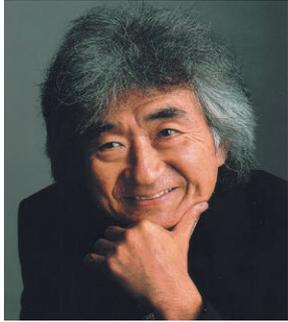


公益財団法人 水戸市芸術振興財団  
前理事長 森 英恵

水戸芸術館は、水戸市制100周年を記念し、1990年に開館しました。特徴的な塔を持つこの建物の設計は、世界で活躍する建築家の磯崎新さんによるものです。

施設には、コンサートホール、ATM、ACM劇場、現代美術ギャラリーがあり、音楽、演劇、美術それぞれの分野で、吉田秀和初代館長そして現在は小澤征爾館長を中心に、自主企画による多彩で魅力あふれる事業を展開してまいりました。また地域の文化活動の拠点として、市民と連携して行う様々な企画も実施しています。これからも水戸芸術館は、まちの中にその活動が広がり、人のこころに深く感動を与えることを目指し、活動を続けてまいります。ご支援ご協力くださいますようお願いいたします。

## 音楽、演劇、美術を身近なものに



水戸芸術館 館長  
小澤 征爾

このたび、水戸芸術館の館長に就任いたしました小澤征爾です。

今から約 20 年前、吉田秀和先生が佐川元市長から運営を任されてこの芸術館を創る時に、吉田先生が私を鎌倉のご自宅に呼んで、室内管弦楽団を組織したいとおっしゃり、つくり上げたのが水戸室内管弦楽団です。それ以来ずっと、ここのコンサートホールで仲間たちと演奏を続けてきました。

まず、水戸芸術館の開館と同時に、水戸室内管弦楽団ができあがった、そのことが素晴らしいことだと思いました。ここが開館した 1990 年頃、全国各地にホールができましたが、ほとんどが貸しホールみたいなものになっているという状況の中で、建築家の磯崎新さんや照明家の吉井澄雄さんがいて、美術も演劇もやるということで、非常にユニークなことを水戸はやっているという印象を持っていました。

今回お引き受けした理由は、定期演奏会の度に水戸を訪れる中で、水戸室内管弦楽団が市民の皆さんに支持されて、愛されているということが分かり始めたためです。私は、音楽は人が生きる上で絶対に必要なものだとは思いませんが、何らかの力を持っていると思いますので、市の皆さんと協力して、音楽をより身近に感じていただけるようなことが出来れば嬉しいです。

初めてこのお話をお聞きした時に、指揮者が館長をできるかということと、それから健康の問題がありました。病気はいつ再発するか分からないと言われてその検査をずっとして、つい最近に無

事卒業という結果が出たので、こうしてお引き受けすることになりました。

もちろん私は指揮者ですから館長という職を務めたことはありませんので、自信があるかと言われるとそれほどありません。ただ、私の音楽家としての経験から言えば、音楽の場合は市民の方にその活動が受け入れられるということが一番大事なことだと思えます。

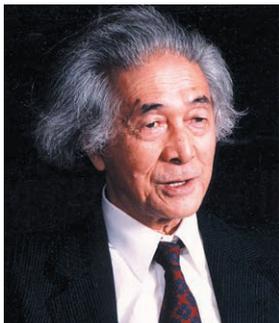
例えばここのホールは約 700 席しかありませんから、直にホールの中に来て下さる方は限られています。ですので、小学生や中学生に対して、水戸芸術館から出向いて、学校のホールや他の大きな施設などで演奏を聴いてもらい、あるいは水戸の学校はブラスバンドが優秀ということで、そうした学生とのつながりができると、そのご家族は、子供たちのことを見ていて、必ず興味を示してくれるだろうと思います。ぜひそうした活動を水戸でもさせて頂きたいと思っています。

今後は、これまで吉田先生が水戸芸術館で実践されてきたことを引き継いで、音楽・演劇・美術の 3 つが効率よく機能して、ますます発展するように関係者一同力を合わせて努めていきたいと思っています。

ここの芸術館には高いタワーがあってみんなのシンボルになっていますが、館の活動についても街の人たちにもしみわたるようになり、身近に親しんで頂ければ、演奏家の私としてはまったく嬉しいし、本望であります。

※これは、2013 年 4 月 4 日に水戸芸術館会議場で行われた就任記者会見におけるあいさつをまとめたものです。

## 水戸芸術館開館記念式典における 吉田秀和初代館長のあいさつ



水戸芸術館 初代館長

吉田 秀和

今日ただいま、これをもって、水戸芸術館の開館を宣言します。今日は水戸芸術館の開館を祝ってこんなに大ぜいの方々がお集りくださって、うれしく存じます。

ご覧のごとく、磯崎新さんの天才的な設計によって、とても立派な建物ができました。ぼくは、はじめて設計図をみた時から、まずあの塔がとてもおもしろいと思いました。こんな奇妙な塔は、世界中どこへ行ってもないでしょう。そのため、この塔の建築許可を取るために、担当の職員が建設省にずいぶん通って、そこで安全基準何とか法の検査も経たということでした。検査をする人たちもさぞ面喰らったことでしょう。世界に一つしかない新しいものだから、当然です。

この芸術館は演劇と美術と音楽という三つの芸術の分野が、並んで展開されるようにできています。こんなものは、日本だけじゃなく、世界中どこへ行ってもないのではないのでしょうか。これはやっぱりそう申し上げたら皆さん方気を悪くなさるかもしれないけれども一水戸だからできたんですね。水戸にすでに、この分野でいいものがたくさんあったら、三つも一箇所に重ねようなんて誰も考えなかったと思うんです。なかったからできたんです。水戸は東京ではないんです。それに、たまたま、非常に独創的なアイデアの持ち主で、それを実現するための勇断と卓越した実行力に富む人物、佐川一信さんが、水戸の市長になった。それで水戸にこんな施設ができた。

ぼくはここで、演劇の鈴木忠志さん、美術の中原佑介さんと三人で腕を組んで一緒にやってみようつもりです。美術のほうは、今日から最初の展覧会が始まりますから、このあと、とっくりにご覧いただきたいと思っておりますけれども、新しい芸術を皆さま方に展示することを主とした目的にしています。芸術というものは、今生きているところから、将来に向かって展望して、これから何を作ることができるだろうか、また、ぼくたちの人生、社会というものがこのさきどうなっていくのだろうか、ということを感じたり、予感したり、あるいは予告するような仕事をする側面もっている。この芸術館では、多分そちらの面を美術が受持つ。

それから、演劇を受持つ鈴木さんは、富山県の山のまた山の奥の利賀村というところで、国際演劇祭というのをすでに何年も主宰されてきた方です。そこでは日本の人ばか

りじゃなくて、外国の俳優や演出家も仕事をしに集ってくる。とっても面白いものです。このほか、彼はまたアメリカの大学の演劇の先生でもあり、アメリカとヨーロッパで自分の演劇活動をしていらっしゃる。もちろん日本人ばかりでなく欧米の俳優を使っています。彼がここでなさる仕事は、そういったすべての延長線上にある。その舞台はかなり変わっています。しかし、外形は非常に独特ですけれども、その土台にあるのは、たいていギリシア悲劇とシェイクスピア、チェーホフ、ベケットというような、世界の演劇の古典とってよいものです。それを日本のこれまで生き続けてきた舞台芸術、たとえば、能、狂言とか歌舞伎とかの歩き方とか、声の出し方とか、そのほかのものを使いながら、現代人にとって、非常に重要で、さし迫った問題につながる一つの総合体として舞台に展開するという、そういう仕事をしてます。これは、古いものを使いながら、それを自分の創造物に転換してゆくという、芸術にとって基本的な働きを示す仕事にほかならない。いや、これこそ芸術の本体だということもよろしい。

芸術館は水戸市制百周年記念事業の一環として構想されたそうです。百年といえば、日本で、いわゆる洋楽を容れてからもほぼ百年あまり。ちょうど水戸が市になったのと同じ頃、日本でもドレミファでもって音楽をやり、演奏したり、作曲したりする仕事が始まりました。百年間やってきて、どんな意味があったらうか。そういうことを検討することに、芸術館音楽部門が役立つよう運営できまいか。その仕事の一つとして、ぼくは、日本で育ち、それから、外国へ行って音楽家としてすぐれた活躍をしている人たちを呼び集め、一団となって演奏してもらったらどうかということを考えてました。

ぼくの理想・夢は、ああ、日本人にも、こんなすばらしい音が鳴らせるのかって、皆さん方がびっくりしたり、感激するような音楽をここで、本当に鳴らしてみたいってことです。出してみるまでは、どんな音になるか知りません。もしも、かつて日本で鳴ったことのないような音がここで鳴り、日本人が日本の中にじっととじこもってしまうのではなく、世界に向かって手をひろげて歩いてきた結果が、百年経ったらこうなったんだ、ということになったら、どんなにいいでしょう！ それは単に日本が小澤征爾さんという一人の名指揮者を生み出したとか何とかいう以上の意味をもつのではないかと。また、ぼくは畑中良輔さん、間宮芳生さん、若杉弘さん、池辺晋一郎さんといった四人のすぐれた音楽家に参加してもらって、委員会をつくり、企画運営をやってみようつもりです。また、日本語による新しい音楽の劇—小型ではあるけど—そういうものも毎年一つくらいずつは作ってご披露したいと思っています。今年は、間宮さんに委嘱しました。もちろん、水戸ですでにすぐれた仕事をいらっしゃる方々の演奏会をやることも考えてます。

こうして、美術がいわば前衛となって、実験的な仕事を受持ち、演劇が中央の本体といった形をとり、音楽がそのあとをゆく。そういう三位一体となるでしょう。といて、何もこの三つの芸術そのものがそうであるべきだということではありません。逆に音楽が前衛、演劇、美術が後衛ということだって大いにありうる。それがまた、三つがひとつになって進む意味にもなっているという次第なのです。

以上はここでは、こういうものを皆さま方に提供するという予告ですが、芸術の仕事の意味は、実はそれだけじゃ終わらないんです。皆さんがここに来てくださって、それをみたりきいたりする。あるいは、笑ったり怒ったりして、あれは何をやってるんだ、ガラクタばかりじゃないかって腹を立てたり、逆に、ああ面白かったと思ってくださった。こんなふうにして作品と、問答をしたり、批判したり、共感したり、感激したり、そういうことがあってはじめて、芸術というのは一つの実りを結ぶことになるのです。「何々という催しものがありました。誰々がとっても上手なピアノをひきました。」「ああそうですか。」これだけでは半分でしかない。いや半分にもならないんです。ですから、皆さん方にどしどし参加していただきたい。これがないと、芸術館は芸術館になりません。せいぜい芸の披露の場所にしかならないんです。それではだめです。芸術館は皆さんに気軽に来ていただき、親しみ、愛されるものになってほしいと考えています。

もう一つ、大事なこと。それはぼくらが提供するものをきいたりみたりするというだけじゃなくて、ご自分もやりましたら、ここでやっていただく。この芸術館は、水戸の市民のもので、水戸の市民に当然開放されるべきものです。歌をうたいたいくなったら、どうぞここに来て歌ってください。

また、ここは貸し小屋ではない。つまり、使っていたから、お金をいただきますってことはやらない。日本の都市には、そういうのがこれまでたくさんあった。ほかにたくさんあるんだから、水戸はそういうことはやらない。お金目当ての建物をつくったわけではない。市民のどんな活動にどう使っていただくか、それを相談するため、何かの委員会を作ろうじゃないですか。ぼくたちと、それから水戸の専門家の間で民主的に選んだ委員と、それから市民の代表と、みんなで一緒になって決めたらどうでしょうか。

とにかく、水戸にできたものなので、これは水戸の市民の財産です。だから、まず、自分たちのものであるということを感じていただく、そういうふうには仕事するのはぼくたちの役目です。

ところで、水戸の方々も、もしかしたら、芸術館は自分たちの税金でできたのだから、どう使おうと自分たちの勝手じゃないか、とお考えになるかもしれない。いや、そうではないのです!!税金を払いさえすれば、その使い途は、

自分の勝手だ、っていうのは間違いです。大変僭越ですが、そのことを、ぼくは、この席でぜひ申し上げておきたいと思う。これが館長としての私の義務だとさえ思います。

日本人は一という、ぼくもその一人ですけれども一自分の金は自分のものだ。だからそのお金で買ったり作ったりしたものはどう使おうと自分の勝手だ、こう思いがちです。それは、ある意味では、本当です。ぼくの靴はぼくが買ったものです。その靴を履いてどこへでかけようと、それはぼくの勝手です。けれども、それだけがすべてではないんです。ちょっと考えてみていただきたいのですが、私たちが税金を払うその収入は、どうやって生れたのですか?日本人は、みんなで精を出して、たくさんの機械その他の製品を作って、それを世界中に売ってお金を儲けているわけですよね。しかし、その原料や資源はどこから来たのですか。カナダ、ブラジルその他の南北アメリカから来たり、インドネシアその他のアジア諸国から来たり、アラブ諸国から来たり、オーストラリア、アフリカそれからヨーロッパから来たりしたものでないですか。芸術もそう。鈴木さんの立派な仕事にしても、シェイクスピアもギリシア悲劇もチェーホフも、何もないところで成長してきたわけではない。中原さんの、これから展示する前衛芸術も、世界の中で日本だけがポツンとあってできたものではない。世界の美術が、しかも何千年という歴史の積み重ねがあって、はじめてできたんです。要するに、外国が、あるいは他人があるからこそ、ぼくたちは仕事をするのができ、それを売ってお金を儲けることができる。よそが買ってくれるから、仕事ができ、買う人がいるから売ることができる。そのように、芸術館もたしかに水戸の皆さん方のものですが、それは、自分たちのほかの人間がいるから、自分たちのものになったんだということ、忘れていただきたいたくない。このコンサートホールは、市民の方が、歌ったり踊ったり演奏したりするところ。劇場は市民の方々が芝居をするところ。ギャラリーは自分の描いた絵を飾るところ。それでいいんです。いいんですけれども、その芝居というものは、自分ひとりで作ったんじゃない。自分たちの先祖の代からずっとあったものであり、それから、よその国からも大いに教わったり教えたりしながら、やってきた結果なのです。

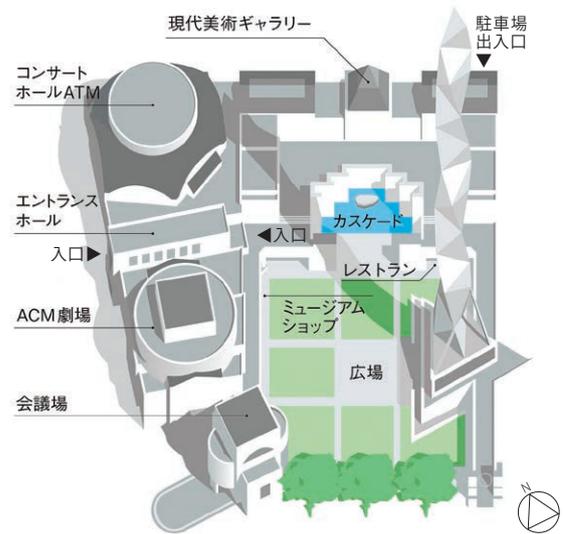
芸術館はだから、どこの誰に対しても、胸襟を開いた存在にならなければいけないと思います。これが、ぼくの、音楽評論家としての哲学だし、それから、ぼくがここに芸術館の館長としている限りにおいて、水戸芸術館のテーゼとして、貫いていきたいと思うのです。水戸のものだけど、視野を水戸だけに閉ざさないでゆき、水戸を超えたものになろうと心がけ、前進することを怠らない。そうやってはじめて、世界のほうでもよろこんで日本を、水戸を受け入れてくれるようになるのです。

※これは、1990年3月21日にコンサートホールATMで行われた水戸芸術館開館記念式典におけるあいさつをまとめたものです。

# 水戸芸術館

水戸芸術館は水戸市制100周年を記念し、平成2年(1990年)に開館した複合文化施設です。特徴的な高さ100mの塔を持つこの建物の設計は、世界的建築家の磯崎新氏が手がけました。

芝生の広場をとり囲むように、コンサートホールATM、ACM劇場、現代美術ギャラリーの3つの独立した施設があり、音楽、演劇、美術の3部門がそれぞれに、自主企画による多彩で魅力あふれる事業を活発に展開しています。また地域の文化活動の拠点として、市民と連携して行うさまざまな企画も実施しています。



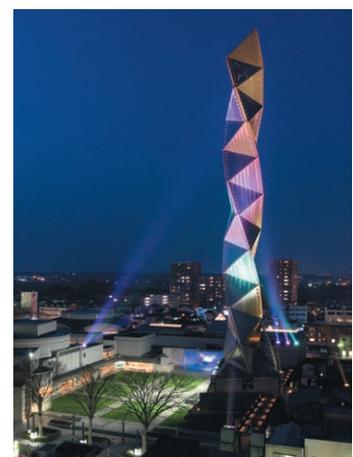
エントランスホール | Entrance Hall

来館者のための共通の玄関ロビー。残響時間の長い吹き抜けの空間(幅7m、奥行き22m、高さ11m)には、1階にチケット&インフォメーションカウンターがあり、2階には、日本のマナ・オルゲルバウ社製のパイプ総数3,283本、46ストップの国産最大級のパイプオルガンが設置され、週末に無料のプロムナード・コンサートを行っています。



広場 | Plaza

1辺約60mの正方形の広場には、南側に3本の大ケヤキ、正面奥に笠間産の御影石が吊られたカスケード(噴水)が配置され、市民の憩いの場となっています。門や塀がない開放的な空間では「あおぞらクラフトいち」やフリーマーケット、コンサートなど年間を通して数多くの催し物が行われています。



塔 | Tower

塔は市制100周年を記念して高さ100m。外装はチタンパネル製で、1辺9.6mの正三角形57枚を三重のらせん状に組み合わせたものです。内部構造を見ながらエレベーターで、地上86mの展望室まで昇ることができます。また、ライトアップにより、1年を通してさまざまな色の照明で彩られます。

## 運営基本理念

- **新しい芸術文化を創造する芸術館**  
既成の評価、ジャンルにこだわらず、独自の視点に基づいて活動を行い、未来へ向けて新しい芸術文化を創造する。
- **国際的な視野にたつて芸術文化の交流を行う芸術館**  
国内はもとより国際的な視野にたつて芸術文化の交流を行い、市民の文化意識の向上と日本の芸術文化の振興に貢献する。
- **楽しみながら考える芸術館**  
幼児から高齢者まで構えることなくいつでも立ち寄れ、それぞれが楽しみながら芸術文化に親しみ、その意味を考えられるような場となる。
- **市民の芸術文化活動の拠点となる芸術館**  
市民の芸術文化の創造及び発表の機会の提供を行うなど、市民の芸術文化活動の拠点となる。
- **都市の活性化に寄与する芸術館**  
市民の文化的創造の拠点としてはもとより、都市の核としての各種機能、また、まちづくりと連携して活動を展開し、都市の活性化に寄与する。

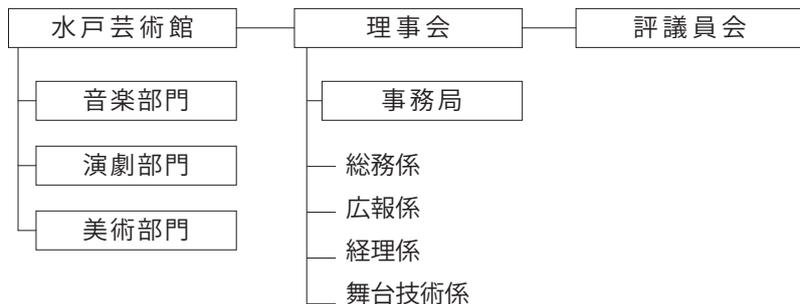
## 運営の特色

- **自主企画を中心に**  
音楽、演劇、美術各分野の専用空間が空洞化しないよう、自主企画による事業を中心とした運営を行います。
- **専属の楽団と劇団を編成**  
館から発信する芸術文化活動を象徴するものとして、専属楽団「水戸室内管弦楽団」、「新ダヴィッド同盟」、「カルテット AT 水戸」、演劇の創造活動を行う専属劇団 ACM (Acting Company Mito) を編成しています。
- **財団による運営と市の管理運営及び事業に対する支援**  
芸術館構想を実施するに当たり、水戸市は「水戸市芸術振興財団」を設立し、芸術館の管理運営と事業について、予算の1%を充てるという方針を立て、その活動を支援しています。

## 水戸芸術館 概要

1	名称	水戸芸術館 (Art Tower Mito)
2	所在地	〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8
3	設計期間	昭和 61 年 (1986 年) 12 月～昭和 63 年 (1988 年) 2 月
4	施工期間	昭和 63 年 (1988 年) 3 月～平成 2 年 (1990 年) 2 月
5	設置者	茨城県水戸市
6	設計	株式会社磯崎新アトリエ
7	主体構造	鉄骨造 (塔)、鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造
8	敷地面積	13,259.90㎡
9	地域・地区	商業地域・準防火地域
10	建築面積	6,873.91㎡
11	床面積	16,138.34㎡
12	階数	地下 2 階、地上 4 階
13	施設	コンサートホール 620～680 席 劇場 472 席～636 席 リハーサル室 3 室 展示室 9 室 壁面長 285 m 会議場 78 席 塔 100 m 展望室 86.4 m レストラン・ミュージアムショップ (運営委託)
14	地下駐車場	217 台 市営五軒町駐車場 営業時間 7:00～23:00 料金 30 分まで無料、1 時間まで 200 円、以下 30 分ごとに 100 円
15	総事業費	10,355,842 千円
16	建設経緯	水戸市立五軒小学校が、敷地狭隘のために移転した跡地に市制 100 周年記念施設として建設された。
17	開館日	平成 2 年 (1990 年) 3 月 22 日
18	館長	小澤征爾 (初代館長：吉田秀和)
19	管理主体	公益財団法人水戸市芸術振興財団 (理事長：福田三千男) 設立：昭和 63 年 (1988 年) 3 月 31 日 基本財産：1 億円 (水戸市全額出損) 水戸市は、水戸市芸術振興財団に対して、芸術館の管理運営を委託している。 担当：文化交流課
20	開館時間	ギャラリー 10:00～18:00 (入場は 17:30 まで) チケット販売 9:30～18:00 演劇、コンサート開催のときは終了時まで開館。 塔 平日 9:30～18:00、土・日・祝祭日 9:30～19:00
21	休館日	月曜日 (月曜日が祝日のときは火曜日)
22	使用料	貸し館はしないので使用料の規定はない。

## 財団組織図



## Concert Hall ATM

### コンサートホール ATM

3本の大理石の柱が特徴的な六角形の室内楽専用ホールです。優れた音響特性を持ち、中央の舞台を取り巻くように扇形の客席と、ステージの後ろにはバルコニー席が配置され、演奏者の息づかいや音楽の細やかなニュアンスを臨場感豊かに楽しむことができます。

### 音楽部門

学芸員が独自の視点で構成するオリジナル企画や、国内外から注目すべき演奏家を招いての企画など、質の高い音楽を紹介する活動のほか、地域で活躍する音楽家の活動を支援する企画を実施するなど、地域の音楽文化の活性化にも積極的に取り組んでいます。

#### — 専属楽団 —

吉田秀和 初代館長の提唱により、日本が生んだ最高の演奏家たちによるアンサンブルを世界に向けて発信していくため、専属楽団を結成し活動を行っています。小澤征爾館長が総監督をつとめる「水戸室内管弦楽団」と、世界的なヴァイオリニスト庄司紗矢香が中心となって結成された「新ダヴィッド同盟」、小澤館長が絶大な信頼を寄せる川崎洋介ら室内楽のエキスパートが集う「カルテット AT 水戸」という3つの楽団です。水戸室内管弦楽団は3度のヨーロッパ公演を成功させるなど世界的な評価を集めています。

#### — 地域の音楽文化に根ざして —

「茨城の演奏家による演奏会企画」や優れた演奏家を発掘し紹介する「茨城の名手・名歌手たち」、幅広い年齢の市民が参加する「水戸の街に響け！ 300人の《第九》」など、地域の音楽文化の活性化に貢献する事業を開催しています。また、「幼児のためのパイプオルガン見学会」「中学生のための音楽鑑賞会」「ちょっとお昼にクラシック」といった、あらゆる年代の方が気軽に音楽に親しめるような工夫を凝らした企画も、年間を通じ実施しています。



客席：620～680席（補助席含）



「水戸室内管弦楽団 第98 回定期演奏会」（指揮：小澤征爾）2017年 撮影：大塚道治



「水戸の街に響け！ 300人の《第九》」 2023年 撮影：田澤純



新ダヴィッド同盟 撮影：田澤純



カルテット AT 水戸 撮影：田澤純

## ACM Theatre

### ACM 劇場

3層の客席が舞台を取り囲む、12角形の劇場です。舞台は10分割されており、昇降機能により自由に形を変えることができ、現代劇から能や狂言まで対応が可能です。

舞台と客席の距離が近いことから、俳優の細かい表情や息づかいまで間近に感じることができます。

### 演劇部門

注目すべき舞台芸術家が、創造的な活動を行える場となることを基本理念に、優れた舞台作品の公演を行う一方、現代劇や古典芸能の振興、地域演劇の育成をめざしたさまざまな事業を年間を通して企画、制作しています。



客席：300～400席(基本形状)

#### — 企画事業 —

実力のある演出家や著名な俳優による古今東西の名作、そしてミュージカルから伝統芸能まで多彩な演目を上演しています。また、茨城ゆかりのアーティストを支援する「未来サポートプロジェクト」や、当館独自のプロデュース公演など、ACM劇場の独特な空間を活かしたオリジナル作品を制作しています。

#### — 教育普及事業 —

「朗読スタジオ」「水戸子どもミュージカルスクール」といった、幅広い年齢層を対象とした各種スクールを通年で実施しています。また、市内の小学生を劇場に招く「小学生のための演劇鑑賞会」や、演出家や俳優によるワークショップなど、日常的に舞台芸術と関われる機会の提供も積極的に行っています。



令和2年度水戸子どもミュージカルスクール発表公演『ナナシーの旅』2021年 撮影：刑部アツシ



ACM劇場プロデュース公演 水戸芸術館開館30周年記念事業  
『最貧前線』～「宮崎駿の雑想ノート」より～2019年 撮影：田中亜紀



水戸芸術館 ACM劇場/ラ コンチャン共同制作  
近藤芳正 Solo Work『ナイフ』2022年 撮影：田中亜紀



ACMファミリーシアター『スーホの白い馬』2021年 撮影：刑部アツシ

## Contemporary Art Gallery

### 現代美術ギャラリー

大きさと光の状態がそれぞれ異なる、9つの展示室とワークショップ室で構成されています。装飾が最低限におさえられた、簡素で美しいプロポーションの展示空間です。床と壁は、アーティストの想像力が自由に発揮できるように設計されました。作品に応じて自然光を採り入れることのできる展示室があります。

### 美術部門

世界的アーティストの国内初の本格個展や国際巡回展のほか、日本を代表する作家たちの個展や時代と呼応したテーマによるグループ展等を開催。新しい芸術創造の世界的な拠点となると共に、市民と現代美術の交流の輪を生み出す活動を続けています。

### — 企画事業 —

現代美術から建築・デザイン・映像などさまざまなジャンルの表現活動を調査研究した成果として、水戸芸術館の会場特性を生かした独自の個展・グループ展を年4回程度開催しています。また、ラテン語で「基準」を意味する「クリテリウム」企画では、若手作家の作品を中心に紹介しています。

### — 教育普及事業 —

幅広い世代の方が現代美術に親しみ、共に考え楽しむための教育プログラムを行っています。市民ボランティアによるギャラリートーク、現代美術及び美術館活動を通じて高校生を中心とする若い世代が多様な価値観に触れる場を提供する「高校生ウィーク」、アーティストによるワークショップなど、多様な創作と対話の場を設けています。



デイヴィッド・シュリグリー「リアリー・グッド」2017年  
デイヴィッド・シュリグリー「ルーズ・ユア・マインドーようこそダークなせかいへ」  
2017年 展示風景  
撮影：木奥恵三 ©David Shrigley, Courtesy of the British Council



「霧の抵抗 中谷美二子」2018年 展示風景 撮影：山中慎太郎 (Qsyumi)



視覚に障害がある人との鑑賞ツアー「session!」2018年 鑑賞風景：佐藤理絵



「藤森照信展—自然を生かした建築と路上観察」2017年 展示風景 撮影：山中慎太郎 (Qsyumi)

# MitoriO

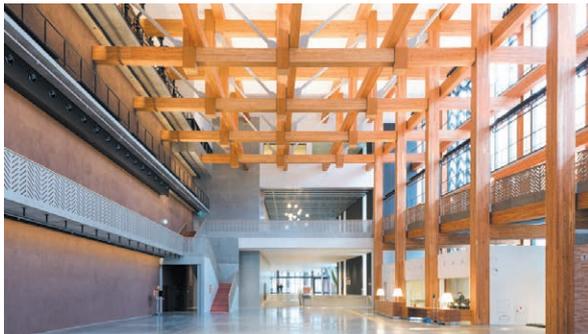
MitoriO(ミトリオ)は、水戸芸術館と水戸市民会館(2023年7月2日開館)そして水戸京成百貨店の3つの施設が並ぶ地区の愛称です。1990年の開館以来、音楽・演劇・美術の3分野で質の高い芸術活動を展開してきた当館と、茨城県内最大の2,000人収容の大ホールを持つ新たな市民会館、県内唯一のデパートである京成百貨店が連携しながら、中心市街地を活性化していきます。



## 水戸市民会館

多様な人々の交流と多彩な文化が織りなす、ひと・まちが輝くステージ。

2023年7月2日開館  
設計:伊東豊雄建築設計事務所・横須賀満天建築設計事務所共同企業体



やぐら広場

木製の柱・梁を組み上げてつくられた屋内広場



グロービスホール  
(大ホール)

茨城県最大の2000席の多目的ホール



ユードムホール  
(中ホール)

日常的に使いやすい  
482席の多目的ホール



大会議室

270名での利用ができる  
大空間の会議室



展示室

可動式パネルにより、さまざまなレイアウト  
構成や部屋を分割して利用できる展示室



和室・板の間

各室に水屋を設けた12畳・15畳の和室  
板の間は22畳

# MitoriO



水戸芸術館  
ART TOWER MITO

水戸市民会館

KEISEI 京成百貨店

公益財団法人 水戸市芸術振興財団  
MITO ARTS FOUNDATION

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL.029-227-8111(代表)  
FAX.029-227-8110

1-6-8, Goken-cho, Mito-shi, Ibaraki. 310-0063 Japan

<https://www.arttowermito.or.jp/>